

が「第六章 近代日本のハンセン病の世界史的位
置」であり、「補論」とはいえ、ここにも本書の
貴重なオリジナリティの一端が垣間見える。

以上のたしかな「実態」解明に立脚して、「地
域による差異や多様性が、「糾弾の歴史」の外に
置かれたときに無化されてしまうことの問題性」
（「終章 総括と展望」）をあらためて指摘した上
で閉じられる本書は、間違いなく良質で生産的な
「修正主義」の成果である。だが、「実態」として
再構成された〈歴史〉そのものには圧倒的な説得
力を感じたものの、〈歴史〉の外部としての〈表
象〉のなされ方には一つ違和感の残ることがあ
った。「糾弾の歴史」というネーミングはおそらく
部落解放運動にインスパイアされたものであろう
が、評者が個人的に知るかぎり、今のハンセン病
の（元）患者さん達（の組織）は、市民社会の枠
組みをけって逸脱することのない、良識ある政
治運動を行っており、「糾弾」などというややネ

ガティブでどこか暴力的な匂いのする表現はそぐ
わないと思う（そもそも部落解放運動でさえ、「糾
弾」というレッテルはあまり好ましくない）。黒
川温泉事件のような無知に起因する陰惨な差別事
件が依然として絶えない中、「彼ら」が切実に目
指しているのは「糾弾」ではなく、（できれば他
の被差別者と有機的に連携するかたちでの）「啓
発」であろう。「序章」において「高次の客観的
記述としての歴史学的分析と、それを通じて拡張
された世界を同時に見通すことが、歴史学に固有
に要求されている課題である」と述べられながら、
伏線未回収のままにおわった臨床現象学的アプ
ローチ(?)とあわせて、「啓発」の手助けとなる
研究のさらなる進展を期待したい。

（平井雄一郎）

[大阪大学出版会，〒565-0871 吹田市山田丘 2-7
大阪大学ウエストフロント，TEL. 06 (6877) 1614，
2011年2月，A5判，332頁，3,800円+税]

吉元昭治 著

『老荘とその周辺——古代中国医学の源流および道家・道教との関り——』

この書は、中国の古代思想と医学の関係を知ら
うとする初学者に最適の概説書である。内容は古
代の老荘の思想と医学がどのような関係にあった
かを明らかにすることを中心として著されている。

「はじめに」ではこの書物の成り立ちがある講
演会の原稿がベースになったと述べられている。
第一部では老荘思想の歴史的地理的背景が書かれ
ている。第二部では諸子百家の歴史解説が行われ、
老子、荘子、列子、黄老道、呂氏春秋と淮南子、
素問靈樞と道家（道教）の関り合い、精気神、
太平経、医道と医家、その他の諸子百家と論説が
続く。第三部では道家から道教への移り変わりを
解説されている。第四部では出土した『老子』の
研究が述べられている。第五部では漢字の起源に
及び、甲骨文に現れる医学記事を取り上げて、そ
の歴史内容実際まで及んで説明されている。第六

部では道家や道教の中の現代に生きる言葉、寓言
を取り上げている。「おわりに」ではこの本の著
作目的が明らかにされている。中国医学の思想が
道家思想と関係が深いことを明らかにしたいとい
うことであった。

この本の内容はどれも興味のある対象であり、
医学と道家という関係に鋭い見方を提示された最
初の本ではないかと思われる。中国の古代思想の
研究者にとっては少しものたらない部分もあるか
もしれないが、入門書概説書としては最適のもの
であろう。また最新の出土資料まで引用され、こ
の本の内容を豊かにしている。

このような素晴らしい視点を持つ本でありなが
ら、多くの誤植や誤字が散見するのは非常に残念
である。筆者は「はじめに」中国思想の研究でな
いことを断っておられるが、日本漢学（伝統的な
中国学）では常識に類することでも誤解が多い。

たぶん厳密な校正がなされていなかったのではな
いかと思われる。例えば、莊子の読み方が人名
はソウシ、書名はソウジと読む慣わしになって
いる(54頁)。申不害を申子害と書いたり、荀子
の名前は荀卿(ジュンケイ)であるが、荀郷(ジュ
ンゴウ)と書かれていたり(114頁)、同じ人を
筍子、筍卿(ジュンキョウ)(199頁)と書かれ
ている。漢字もまちまちだし、ルビも異なるので
どれが本当かわからなくなってしまう。また竹簡
と書く所がすべて竹筒となっていて(237頁)、
全く意味が通じなかった。特にルビの間違いが多
い。漢音を正しくはカンインと読むべきだ(249
頁)との見解をお持ちの筆者にしては、余りにも
多い間違いに早急に訂正文を出される方がいいと
思われる。最後にどうしても読めなくて半日考え

た文章を指摘しておく、遍歴医の注でどうしても
読めない漢字が出現した。どの辞書を引いても
出現しない漢字で、誤植であると思われた。この
文章の正しいと思われる文章だけを上げておくと
「串鈴医(センレイイ)(走医、鈴医のもとは道士
の医師でさらにもとをたどると「巫医」になる)」
だろう。

紹介者はこの本の内容の素晴らしさを取り上げ
たゆえに、この誤植やルビの間違いを徹底して校
正されて第二版が出ることを切に望むものであ
る。

(猪飼 祥夫)

〔たにぐち書店、〒171-0014 東京都豊島区池袋
2-69-10、TEL. 03(3980)5536、2011年2月、
A5判、296頁、4,000円+税〕

岡田靖雄 著

『吹き来る風に——精神科の臨床・社会・歴史——』

本書の著者である岡田靖雄氏は、2002年に『日
本精神科医療史』(医学書院)を上梓されている。
長年にわたり蒐集してこられた精神医療史の膨大
な資料をもとに、奈良時代から現代(1965年頃
まで)の我が国の精神科医療の歴史を記述された
浩瀚な著作である。

この岡田氏による近著『吹き来る風に——精神科
の臨床・社会・歴史』は、いわばその続編のよう
なものである。精神科医療に携わり、東大精神科
の赤レンガ闘争にも関わったまさに当事者による
精神科医療の現代史である。しかしそれはもはや、
精神科医療史の歴史を客観的に記述する歴史
ではありえない。客観的に把握することのきわめ
て困難なこのような同時代史を描くために、著者
の岡田氏は一見したところ奇妙にも見える道具立
てを用心している。

本書の冒頭「第1章 たどってきた道」では、
著者自身の個人史が語られている。しかも著者自
身は「わたし」として語られることはなく、首尾
一貫「かれ」として語られている。高等学校卒業

までのこと、東京大学の駒場と本郷でのこと、医
学部を卒業後に精神科に入局し、松沢病院で医療
に携わり、東大精神科の赤レンガ闘争に巻き込ま
れ身を退いたこと、荒川の診療所での医療、精神
科医療史と社会的活動のことなど、著者のたどっ
てきた道が語られる。そして「かれ」のことを偏
人であるという。行動特性や個性のさまざまな側
面を客観的に記述する。貪欲さはなく贅沢はしな
い。つきあいは義理がたい。弁舌はさわやかでは
ない。慎重である。今でも本、雑誌はよくよんで
いる。そして「かれの感じ方・思いは同年代の大
多数とはかなりちがっている。我がつよくて協調
性にかけるということになりそうである。でも自
分の行動は我にしたがっていきかない。」

このように著者自身のことを規定した後、「第
2章 臨床」では自身の精神科医療の経験やその
あり方についての認識が述べられる。岡田氏編の
『精神医療——精神病はなおせる』(勁草書房、1964
年)と岡田氏著の『精神科慢性病棟——松沢病院
1958-1962』(岩崎学術出版社、1979年)の成立